オーストリア文学史

エルンスト・ヨーゼフ・ゲルリヒ 著
清水健次・土屋明人 訳

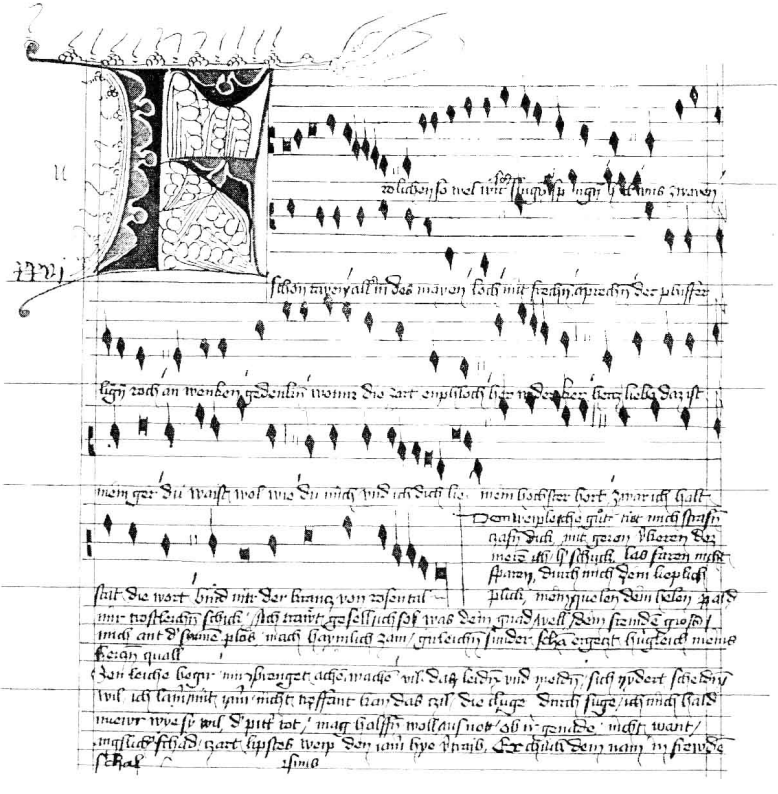
Ernst Joseph Görlich:
Einführung in die Geschichte
der österreichischen Literatur

南江堂

オーストリア文学史

エルンスト・ヨーゼフ・ゲルリヒ　著
清水健次・土屋明人　訳

〔付〕ヘルムート・ヒンメル：
1918年以後のオーストリア文学



Lied Oswalds von Wolkenstein aus der 1425 von ihm selbst (?) geschriebenen Sammlung

南江堂

訳　者

清水健次(しみず・けんじ)(日本大学教授)
東京都練馬区大泉学園町7丁目4番9号
土屋明人(つちや・あきと)(愛媛大学助教授)
愛媛県松山市本町6丁目10の1-405

オーストリア文学史

定価 4,200 円

昭和58年8月25日　初版発行

著　者　エルンスト・ヨーゼフ・ゲルリヒ
DR. ERNST JOSEPH GÖRLICH

訳　者　©清水健次
土屋明人

発行者　小立武彦

印刷所　研究社印刷株式会社

発行所　株式会社 **南江堂**

本　店　113　東京都文京区本郷3丁目42番6号
電話 03(811)7234(代)・振替東京 2-149

支　店　604　京都市中京区寺町通御池南
電話 075(221)7841(代)・振替京都 9-5050

落丁や乱丁などの場合にはおとりかえいたします

3098-003571-5626

凡例　及び　備考

一、(1)本書は〈Ernst Joseph Görlich, Einführung in die Geschichte der österreichischen Literatur, Wien 1948³〉を全訳したものである。原著書の初版は一九四六年に出版されているが、翻訳の底本には第三版を使用した次第である。また、原著書の表紙には „Österreichische Literatur-Geschichte“ と銘打たれているので、出版社とも相談の上、本訳書表題も『オーストリア文学史』とした。(2)なお、このErnst Joseph Görlichの原著書の現代オーストリア文学の部分を補充するものとして、本書には、〈1918-1968 Österreich —— 50 Jahre Republik, hrg. v. Institut für Österreichkunde, Wien 1968〉の中に含まれているHellmuth Himmelの小論 „Die österreichische Literatur seit 1918“ の翻訳「一九一八年以後のオーストリア文学」が付加されている。

二、原文には、ラテン語、イタリア語、スペイン語、フランス語の他に、ハンガリー語、チェコ語、スロヴァキア語、ポーランド語、セルビア語、クロアチア語、スロヴェニア語、ロシア語、ルーマニア語、ギリシア語が挿まっているが、これらはすべてラテン文字で記されている。

三、人名、地名等の固有名詞の和文表記については、(1)ドイツ人名及びドイツ地名の発音は、ドゥーデンの『発音辞典』新版(Duden Bd. 6 —— Das Aussprachewörterbuch, 1974)に出来るだけ忠実に従って、原語読みとした。(2)①ドイツ以外の国の人名、地名等の発音は、それぞれの専門家を煩わし、その教示を得て、それぞれの国の発音に従った。この場合、オーストリアの人名、地名等の発音も——例えば〈Seidl〉は「ザイドゥル」と発音するように——オーストリア人の発音に拠った。②但し、専門家の教示が得られなかったドイツ以外の国の人名、地名等の発音は右に挙げたドゥーデンの『発音辞典』新版に依拠した。(3)ドイツ及びドイツ以外の国の人名、地名等の中で、日本において慣用的に定着している名称の表記は、主として岩波書店版『広辞苑』に従い、その際更に、岩波書店版『西洋人名辞典』、研究社版『世界文学辞典』、新潮社版『世界文学小辞典』、三省堂版『コンサイス人名辞典』を参照した。

四、本書巻末の索引に関して言えば、(1)「人名」、「事項」の索引には原著者の索引を採録し、これに訳者が必要と認めた限りの人名及び事項を加えた。(2)原著書には「作品」の索引が欠けているので、訳者が「作品」の索引を作製し、これを原著者

の索引に補足した。(3)また、Hellmuth Himmel の小論「一九一八年以後のオーストリア文学」の索引も訳者が作製したものである。

五、最後に、原文の隔字体の語は、本書においては、傍点付きの語となっており、原文に記されていなくて、訳者が付加した人名、生歿年はイタリック体で表記されていることをお断りして置き度い。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まえがき

本書は、その構成を、信頼できるハンドブックであるクッマー (K. F. Kummer) 博士とシュタイスカル (K. Stejskal) 博士の共著による『ドイツ文学史入門』*Einführung in die Geschichte der deutschen Literatur* に依存しているものであります。

著者の私は、この著作はテーマは大きいけれども、このテーマに対してささやかな寄与をなせるものに過ぎないことを存じております。本書は、文学に親しむあらゆる人々に、しかし、誰よりも若い世代の人々に、オーストリアの詩人や作家の豊かな創作品について、先ず第一段階の解明をして見ようというものであります。この書は、決してわが国に産まれた著作品に関する独創的な大著——就中ナーグル－ツァイドラー－カストゥレ Nagl-Zeidler-Castle の浩瀚な文学史——に代わろうとするものでもなく、また代わり得るものでもありませんが、しかし、それでも、それらのものと並んで或る一つの小さな座席を占めることができるものと思っております。初版発行後直ぐに必要となりました第二版の刊行に当たりまして、この書の徹底的な校閲を行ない、その際また、著者の側からの提唱に依りまして、出来るだけのことが斟酌・対処されました。それで、一つの確かに便利な付録としまして、新たに作成された索引が付け加えられたわけであります。この付録の添付につきましては、カール・シュタイスカル氏の好意的な援助に深甚なる謝意を表し度いと思います。

ウィーン　一九四六年十二月

博士エルンスト・ヨーゼフ・ゲルリヒ (Dr. Ernst Joseph Görlich)

目次

まえがき……vii
序論……一
I. バーベンベルク家時代……五
1. 文化と現実世界……五
2. 発端——宗教的詩文学……一一
3. オーストリアの英雄伝説……一三
4. 韻文長篇小説と韻文短篇小説……三〇
5. オーストリアのミンネザング(恋愛詩)……三四
II. ルネサンスとバロック……四五
6. 新しい時代……四五
7. オーストリアの初期人文主義……四八
8. 市民階級の詩文学と旧オーストリア演劇……五五
9. オーストリアの盛時人文主義……六〇
10. バロックへの過渡期……六四

11. ヨーロッパのバロック……六八
12. オーストリアのバロック＝叙事詩……七〇
13. オーストリアのバロック＝抒情詩……七三
14. アーブラハム・アー・ザンクタ・クラーラとバロック＝散文……七四
15. オーストリアのバロック＝演劇……七八
16. ピエートロ・メタスターズィオとオーストリア＝イタリア詩文学……八二

III.

グリルパルツァー＝時代……八七

17. 大きな転換……八七
18. オーストリアにおける文章語の進出……九一
19. ウィーンのブルク劇場とヴァイマル古典主義……九五
20. オーストリアの啓蒙主義とドーナウ河流域国……一〇〇
21. フィーリプ・ハーフナーと旧ウィーン民衆舞台……一〇四
22. オーストリア的＝愛国文学……一一〇
23. オーストリアの古典主義——ビーダーマイアー……一一三
24. オーストリアの古典主義作家——グリルパルツァー……一一五
25. オーストリアの古典主義作家——ライムント……一一四
26. オーストリアの古典主義作家——シュティフター……一一五

27. オーストリア古典主義作家の同時代人たち……一五七
28. チャールズ・シールズフィールドと異国趣味文学……一六六
29. フランツ・シュテルツハーマーとオーストリアの方言文学……一七三

IV. 新しい潮流……一七九

30. 自由主義と社会主義……一七九
31. 過渡期——ヨハン・ネストロイ……一八三
32. オーストリアの写実主義の開始……一八五
33. 写実主義的叙事詩——ハーマーリングとデレ・グラーツィエ……一九一
34. ルートヴィヒ・アンツェングルーバーと写実主義的ドラマ……一九四
35. ウィーンのオペレッタ……一九八

V. オーストリアのモダニズム……二〇三

36. ウィーンの詩人グループ……二〇三
37. 新しいオーストリアの抒情詩……二一四
38. オーストリアの「ルネサンス」……二二一
39. オーストリアの郷土文学……二二六
40. オーストリアの労働者文学……二三九
41. 現代と展望……二四一

一九一八年以後のオーストリア文学（ヘルムート・ヒッメル）……二四七

あとがき……二六九
索　引……(1)

序　論

私は私の祖国の言葉を話す。
フランツ・グリルパルツァー (Franz Grillparzer)

1. 文学史の概念と領域　文学という場合、われわれは、これを、一定の時代及び一定の地域において創作されたあらゆる精神的な作品と解する。そもそもそれ自体としては、世間一般に口承の形で語り伝えられる精神的な作品もこれに含まれて差し支えないが、しかし、これを後世に保存して行くためには、文書にして置くことが絶対的と言えるほど必要となってくる。

このような広義においては、文学という概念はすべての精神的な所産を包含し、その場合、それが文芸的なものであるか科学的なものであるかは問題ではなく、全く実用的な目的に使用される著作物（辞書、旅行案内書、その他これに類するもの）すら、この広い概念規定の中に入ってくる。最も古い時代の文学の場合は、この種の著作物も取り入れられることになるだろう。しかし、その他一般には、文学の概念は、本質的には、精神的な態度による作品だけに限られている。そして、われわれは、これらの作品の中に人間及びその時代の物の見方、志向、風俗が綴られているのを知ることができる。これらの物の見方、志向、風俗は、その風土や民族の特性を示

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

し、従ってまた、われわれに、それらを一つの統一体として見ることも可能にするものである。

ところで、文学史は、最古の時代から現代に至るまでのこの文学の発展の叙述である。この叙述のために与えられた紙数に応じて、われわれは、多少の程度の差はあっても、委曲を尽くして、これを纒めることができるであろう。文学史の或る一つの入門書としては、細目に亙って立入って行くことができなくて、特徴的な諸問題と大きなガイドラインを考慮する余地しかない。そして、過去の時代の文学には一種の普遍妥当的な価値判断が下されるのに対して、現代の文学に関する叙述は、他の場合よりも多くその叙述者の主観的な感覚に委ねられている。それにも拘わらず、叙述者は、その叙述においても、取り扱われる国及び民族の特性そのままの根本的な考え方というものをはっきりと提示しなければならない。しかし、また、一つの国の文学は、それ自身が孤立しているものでもなく、また封鎖されているものでもなくて、近隣の文化圏の同時代の文学と諸々の繋がりを持つものであることをわれわれは決して忘れてはならない。

2. オーストリア文学の概念と領域　このオーストリア文学史入門書は、最古の時代から現代までの、オーストリアの国及びその民族の特性と特質をよく表わしている精神的な作品の発展の叙述を行なうものである。この入門書は、それ故に、一般によく使われるオーストリアの日常語によって書かれなかったものでも、オーストリアの精神的な行き方を反映しているものであれば、すべてこれを含める。何故ならば、この原則は、既にずっと以前からヨーロッパ諸国のそれぞれの文学の中に出てくるラテン語で書かれた中世の詩文学にも当て嵌まるからである。しかし、他方では、このオーストリア文学史入門書は、確かにオーストリアに——実に屢々全くの偶然から——生まれたものではあるが、しかしオーストリアの文学の特徴的な発展過程の中には組み入れられない精神的著作品は除外する。——この入門書は、しかし、最後になお、ヨーロッパ諸国からオーストリアの中へ流

れ込むように及んできた影響及びオーストリアから、周辺の地方や地域へと更に伝えられ及んで行った影響というものもすべて考慮に入れるものである。

3. 文学、文化、そして経済的現実世界　文学は、一定の時代の文化の本質的な表現として、現実の生活と結びついている。文学をその時代及びその時代の文化的＝経済的な現実世界の中に入れることを心得ている者だけが、人間社会における文学とその機能を正しく把握するであろう。本当の詩人は、決して時間・空間と無関係に「夢想郷」の中に住んでいるのではなく、自己の民族及び国土と結ばれている。しかし、このことは、本当の詩人は人間生活の他の事象と不可分な関係にあるように、経済発展とも不可分な関係にあることを意味する。一定の精神的な行き方は一定の時代においてのみあり得ることである。封建制度時代の騎士詩人は、初期市民世界の出現と共に消え去って行き、職匠歌人の歌が栄えることができるのは、近世初期の君主絶対主義がその勢力範囲や宮廷に才能ある詩人・文人や詩・文学を引き入れる以前の時代だけのことである。ロマン主義、啓蒙主義、ロココ、ビーダーマイアー、自然主義、新即物主義というのは、ただ単に詩人の個性による作風を意味するだけでなく、同時にまた、われわれの全文化及び文明の社会的また経済的な状況でもあるのである。これらの事実はただ単に戯曲に見られるばかりでなく、叙事詩や抒情詩にも現われている。しかし、これらの事実は恐らく詩文学の中でも戯曲の世界において最も判然と見られるであろう。何故ならば、戯曲は社会の好尚と一致することに最も直接的に依存している詩的な生の表現だからである。従って、少なくとも、歴史的発展の一定の時期に属する詩人たちがいたその時代の状況に言及し、これを示唆することは、詩文学の歴史においても必要である。

4. オーストリア文学史の時代区分　先に詳述した意味において、われわれはオーストリア文学の歴史を以下の通りに区分する。

Ⅰ．バーベンベルク家＝時代、または身分制的＝封建制度下の詩文学の時代　われわれは、ここでは、最初の痕跡として残されているオーストリア詩文学から、聖職者、吟遊詩人、騎士、そして市民の詩文学を経て、近世初頭の君主絶対主義の台頭までのそのオーストリア詩文学の時代のことを意としている。

Ⅱ．ルネサンスとバロック、または宮廷詩文学の時代　この時代とは君主絶対主義の始まりから、バロックの時代を経て、マリーア・テレーズィア及びヨーゼフ二世の「啓蒙」絶対主義の時代に至るまでのオーストリア詩文学の時代のことである。この世紀の民衆的な詩文学も君主たちの王宮の影を宿している。

Ⅲ．グリルパルツァー時代、または市民の詩文学の時代　この時代はフランツ・グリルパルツァーの名前と結び付いているあのオーストリア詩文学の全盛時代である。これは、本質的には、フランス革命（一七八九年）の始まりから、フランツ・ヨーゼフ一世 Franz Joseph I. の統治の立憲議会政体下に見られる憲法に基づく永続的法治生活の施行に至るまでの時代を包含している。

Ⅳ．新しい潮流　リアリズムと呼ばれる芸術の流派の中の文学に、民主主義、自由主義、そして社会主義という概念で表現されている政治的及び社会的な新秩序を目標に掲げた新しい諸傾向が現われているが、その新しい潮流である。

Ⅴ．オーストリアのモダニズム　このモダニズムは、われわれの最近の過去及び生きた現代の詩文学を包括するものである。

I. バーベンベルク家時代

1. 文化と現実世界

バーベンベルク家までのオーストリア　今日のオーストリアが広がっている領域は、先史時代の初めには既に人が住んでいた。この住人たちは、ピレネー山脈からコーカサス山脈に至るわれわれのヨーロッパ大陸全体に入植していた――ロシアのコーカサス学者のニーコラウス・マル Nikolaus Marr が提案しているところに従えば――「ヤペテ」民族系と呼ばれる前インド・ヨーロッパ種族の一種族であった。そのインド・ヨーロッパ人の侵入は、この古代ヨーロッパを解体させ、また、次の新しい諸民族が出現する発端をつくった。オーストリアの地を新しい自己の国土としたのは、先ず最初に、イリリアの諸種族であった。この種族は所謂「ハルシュタット」(Hallstatt) 文化(訳注＝「ハルシュタット」は上部オーストリアの地名)の所有者である。この種族に続いてケルト民族が波の如く押し寄せ、この種族を支配し、オーストリアの地にノーリクム (Norikum) 王国を建てた。このケルト人たち――「ラ・テーヌ (La-Tène)」＝期(訳注＝鉄器時代の一区分の名称[この時代の遺物の発見・出土地であるスイスの町ラ・テーヌに因む])の諸産物はこのケルト人たちに依るものと考えられる――

は、紀元前約百年頃に初めて武力をもってノーリクムの地（訳注＝東アルプスの地）でキンベル族（訳注＝ゲルマンの一種族）やチュートン族のゲルマン＝ケルト人群団と会戦した（紀元前一一三年、ノライア［訳注＝上部シュタイアーマルクのノイマルクトの近傍の地と推測されている］）あのローマ人たちとは、敵対的・戦闘的、また友好的・平和的な関係にあった。アウグストゥス Augustus（訳注＝ローマ帝政初代の皇帝）の時代にノーリクム王国はローマ世界帝国の勢力範囲に落ち入った。しかし、この王国は「ノーリクム王国」として、なおローマ統治権の下で存続し続けたし、そして、この王国の最初の副王たち（「ノーリクムの」太守たち）はノーリクムの名を名乗っている。ローマは、こうしたやり方で獲得したドーナウ線（ライン）の防備を、大部分は、そこに存在したケルト＝イリリア人の集落を結ぶ一連の要塞施設によって固めた。こういう風にして、レンツィア（リンツ [Linz]）、ヴェルディデーヌム（ヴィルテン [Wilten]）、オヴィラーヴァ（ヴェルス [Wels]）、ノーリクムのテウルニア（マリーアーザール [Maria-Saal]）、レーツィエン（Rätien）のブリガンツィウム（ブレゲンツ [Bregenz]）、ヴィンドボナ（ヴィーン [Wien]）、そしてカルヌントゥム（ペトロネル [Petronell] とアルテンブルク [Altenburg] の間）がローマの軍事都市及び民間都市として誕生した。ローマの進出と共に、商人、兵士、役人、士官がドーナウ河流域国へやって来て、彼らの影響の下で、この国はロマン民族的な様相を帯びた。すなわち、土着のケルト人から、独特のローマ外地文化を持つケルト＝ロマン民族人が生まれた。

ローマ帝国の解体の後に、ゲルマン部族が一時的にわれわれの諸国土に居住したが、しかし、その際、ケルト＝ロマン民族の住民を完全に駆逐し、その文化を根絶するということにはならなかった。五六八年以来ドーナウ平野に定住していたアヴァール族（訳注＝タタール族でカール大王に滅ぼされた）に続いて、スラヴ民族の分子が東方からオーストリアのアルプス地方に流れ込んできたが、その一方では、この同じ世紀の初頭に、古代バイエルン人（Bajuware）たちが沿岸ーノーリクム（＝上部オーストリア）を占有し、ここから西方に向かって今日のバイエルン（Bayern）へ前進

し、また南の方に向かっては、ランゴバルト族（訳注＝ゲルマンの一種族）の支配区域の境界のところまで進出して行った。古代バイエルン人の起源については、中世初期の歴史の中で最も論議を呼ぶ章の一つとなっている。研究家の一部は、古代バイエルン人たちを、彼らが嘗ての故国ベーメン（ボヘミア）から出て来たために「ベーメン国の男たち」（＝Bajuwaren）と呼ばれたマルコマンネ種族（訳注＝ゲルマンの一種族）の後裔だと見ている。他方、他の研究家たちは、古代バイエルン人たちを、判然とした東ゲルマン民族（東ゴート族）の血の流れているゲルマン民族の（そして、また、ゲルマン民族ではないところの）いろいろな種族及び一部残存分子の結合したものだと見做している。いずれにしても、古代バイエルン語は、ゴート語との見紛うことのない諸々の関係を持っている。古代バイエルンは、フランク大帝国に編入・合併された後も、自己の自主性を長い間に亙ってずっと主張し続けた。

カール大帝 Karl der Große は、アヴァール族が出兵して来た際、このアヴァール族の軍勢を打ち砕き、自己の統治権をビザンチン帝国の勢力地帯のところまで広げて行った。伝説では、ウィーンのペーター教会はこの皇帝の創立によるものである。フランク帝国の保護の下で、曽てのアヴァール族の土地に生活の花が咲き始めている。十世紀初頭のラッフェルシュテッテン（Raffelstetten）関税法規（訳注＝オーストリアの中世の現存する最も古い経済史の記録）が、われわれに、ドーナウ河流域地方の経済の内容を教えてくれているし、既にこの時代にドーナウ河で行なわれた商取り引きについて記している。マルヒ川（Die March）の戦い（九〇七年）において、マジャール族の騎馬部隊がこのマルヒ川を越えて突進し、ルーイトポルト公 Luitpolt (Herzog) が敗北すると、これと共に、オーストリアの歴史の発展におけるこの時代は終わりを告げるのである。

マジャール族の時代も、これによってこの国の過去が完全に断絶するということにはならない。その間の持続的な繋がりが維持されるのである。そして、レッヒフェルト (Lechfeld) での戦い（九五五年）の後に、オットー大

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com